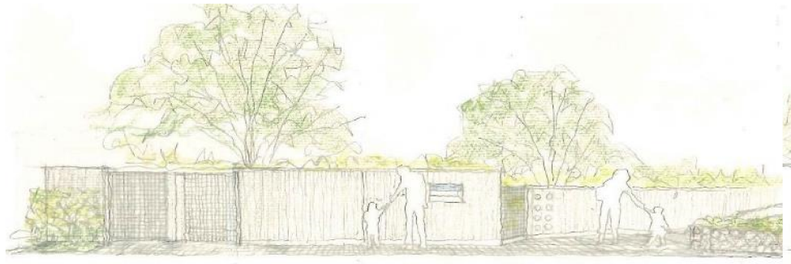
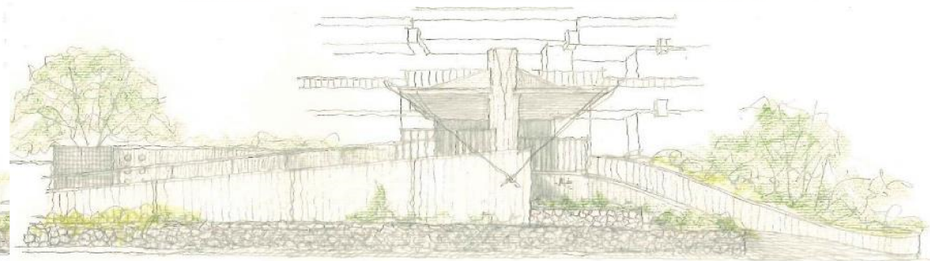
エントランスキャノピーを支える一本柱の耐震性不足から庇端部を切り落とし、柱はコンクリート巻補強とした。太い柱の存在感を和らげようと、テーパーを付け、柱断面を工夫した結果、エントランスの格好のアイストップとなった。改修前の柱根元には小さな池があり、その記憶を残すようにゴロタ石敷きの水無川を道路に沿わせてキャノピー庇の雨水を落としている。雨が降ると水景ができる。水辺の記憶となるようなアヤメなどの抽水植物を植えている。

家の前庭が 街の風景をつくる。

都市部のマンションはセキュリティ面から閉鎖的になりがちであるが、建物の外観は所有者だけの物ではない。隠されていない限り、建物がまちの風景や景観をつくっていく。
家は門となる入口からエントランスまでの設えがあると、お帰りなさいと我家に帰ってきた感が大きくなる。緩やかなスロープは誰にとっても歩き易い上に視線の変化を得られる空間である。そこでスロープを道路際から少しセットバックさせ、その間に植込みを設けると道路から離れた安心感と共に奥の障壁の緑とが輻輳した奥行が得られた。
建築・外構・植栽を一体で考える事で、高経年マンションに新しさが加わった。





建築作品部門

まちづくり全般
通りに外部空間の楽しさを見せるマンションアプローチへの改修

東京都 杉並区

Nコーポの外構改修

中央線沿線は良好な住宅街として発展して来たが、この周辺は戸建が多い閑静な住宅街である。中央線沿いには中層の建物が建ち並んでいる。このマンションは昭和44（1969)年竣工、分譲マンションとしては初期に建てられており、築後47年を経ている。
旧耐震設計建物であり、杉並区の助成を得て耐震補強を行った。居住者の高齢化からもアプローチのスロープ改修の必要性は高く、エントランスキャノピーの耐震化と同時に、アプローチのリファインを行った。道路に面する前庭であることから、居住者には入口らしさと共に道路への表情をどうしつらえて行くかが重要なキーであった。
↓*Before,* 前面の緑は生きてなく、車寄せのスロープは勾配が急過ぎた。

応募代表者： 近藤　一郎

有限会社　プラナーク設計
1971年　戸田建設株式会社
1973年　瀧光夫建築・都市設計事務所
1992年 有限会社プラナーク設計
実務経験年数：45年

住宅に永く住み続けられることをテーマに設計している内に、マンションの大規模修繕工事をメインとするようになった。長く住み続ける事は街の歴史や記憶を受けついで行く事であり、それは住む人々の安心感につながっていく。ひいては環境に優しい。建物の長寿命化は後の世代に住まいを譲り渡していける事から豊かさにつながっていく。建物本体の耐震補強は建物反対面廊下側に、制震ブレースを設置している。

■設計協働：今井 章晴　／株式会社ハル建築設計